

「科学的概念」の獲得の体験とその積み重ねが殆んど無くなってきたこと、従って「生活的概念」から「科学的概念」への移行がその質量ともに「幼児化」の段階にあるのではないかと推論したくなるのである。このように考えてくると、私の授業で問題にしている学問体系の結び目と学生の認識発達の節目とが完全にずれていると判断せざるを得ないのである。

しかしながら、「科学的概念」は学校教育の産物である。このことを再び言うのは、教える側の指導性と責任を強調したいからである。今までは、研究と教育の一体性のもとに「教官の創造的研究を基盤に、学生の問題意識を喚起し講義を行う」と或る意味では漫然と云われてきたが、現在の学生の状況に照らしてみれば、これだけではダメなような気がしてならない。学生の問題状況が前述のようであれば、学生の自発性

の限界を見極めたりえて、教師の指導性を媒介としてその限界を乗り越えさせるような観点が必要だと思うのである。即ち、「科学的概念」を固定した絶対的なものとしてとらえず、「教育の研究」とおしてその概念内容を吟味し科学自体をとらえ直すこと、ひいては各学問体系と結合させた「教育科学」を構築していく努力をすべきではないだろうか。初等中等教育の場では、民間の教育研究グループの手によって、立派な成果を挙げていると聞かすが、現在の大学生が上述のような状況であれば、今や大学という場に於ても、この努力をしない訳にはゆかないのではあるまいか。

* 岩波講座「子どもの発達と教育」第5巻105頁、同第3巻293頁、(1979)

** 昭和54年11月6日付朝日新聞「わたしの云い分」(東大名譽教授大内力氏との対談)

ある地理屋の根をなす部分

稲田道彦

地理学者をその学問にかりたてている興味の本盤にあるものでも題すべきであろうが、そのように書けるほど学問的に整然と整理された体系にのっとった話題でもないし、常日頃の偶感を文字にしようとする程度のもなのでこの題にした。

地理学はずい分と古くから続いてきた学問である。古代ギリシアにもう地理学という分野が存在していた。そこで行なわれた地理学は主に自分達の住んでいる場所ではみられない現象を整理して記述するもので

あった。今でいうならルポルタージュにあたるものが、その中心であったようである。しかし、単なる記載でないことがそれを学問にまで高めたのである。自分達の住まう地表面、空に輝く太陽・月といった理解の範囲を越える自然、そしてその自然という不思議な舞台の上で活動している人間の占める位置について科学的で哲学的な説明を加えようという意図が大きく存在していた。ここでの科学的とは論理関係を明らかにしようとすることであった。だから地理

学の方法としては、ギリシア人の常識の範囲を越える他の地方でみられる現象を数多く取り上げ、その一つ一つに解釈なり、その時点での最高限度に論理的な因果関係の説明をするものであった。今から考えると、全くの的はずれの点もあるが、すばらしい洞察力をその説明に加えているものも見られる（例えばヘロドトス¹⁾の著書）。その場合の記述の単位は把握するのに一番簡単な国とか地方という、平面的な広がりである場所であった。この場所でもって区分して考えることは今まで地理学のある大きな前提として続いてきた。

その後も、ある特定の場所でおきる特徴的な事象を書き連ねて、それらに論理的な解釈をほどこす学問的態度は継承されてきたのであるが、これに大きな波紋を投げかけるのが、近代の科学革命の動向なのである。科学が依って立つ論理的な思考が現象の生起する法則の追求に向いたのである。ここで問題となっているのは現象唯それだけである。ところがその視点を現象のみでなく、それがおきている舞台の方にも置いていた地理学に、ある種の変向が迫られたのである。しかもその舞台が例えば戦争が相次いだ時代の国家領域のように歴史的又は人間的な要素によって形成された境界に囲まれた領域は自然環境の差により画された領域に比べてことにそうであった。

これら一般的に地誌の方法と呼ばれる地表面での現象の記載をする学問方法に加えて、個々の現象について研究する方法（系統的とも一般的とも言う）が始まった²⁾。総合的な方向を踏襲しようとする方向と、科学として成り立つために法則定立的な個々の現象がおきる要因を細かく分析していく研究方法をとる方向とが、学界内部にで

きた。現在では、科学の一般的な発展の方向をうけて、法則定立の方向に向かって、大きく揺れながらであるが徐々に進んでいる。その際、系統地理学で扱う対象は従来からの研究対象の一部を取り上げるということになる。もともと地表面のすべてを取り上げてきたのだから、取り上げ方はいくらかもあり、焦点のしぼり切れないという様相を呈する。大きく自然と人文の両分野に分けられているが、もう一つつっこんだその中身は、非常にバラエティに富んでいる。研究対象を狭い範囲に限れば限るほど、他の現象との関係を考慮しなければならなくなる点もあらわれてくる。そして分野を狭く限れば限るほど、対象を深く追求すればするほど、地理学の潮流に残されそうになっている総合的に対象を把握する方向が、地理屋の精神の根の部分として深く根づいているような思いにとらわれる。現代科学の中にあっては、場所的な広がりの上でおこるあらゆる現象の相互関連そして現象の複合体を表現し、そういった総合的な現象がおこった原因、そして将来への展望などを考究するには、よほど卓抜した方法が望まれると思われる。

総合的にとらえるという意味で、常に思い浮ぶ人達がいる。ダーウィン、フンボルト、ニュートン、カント、リッター、リヒトホーフェン、ラッツェルらの18・19世紀の学者達である。彼らは何らかの形で地理学への関りや影響をもった人達である。その時代の最高のそして最先端の知識を一身に集め、それらを総合して自分の学問を作った。別の言い方をすれば、あらゆる学問に一人の人間が通じることでできた幸せな時代の人達である。現代は分野の分化が進み、一人で全てに通暁することはむずかし

いが、何らかの形でこの研究態度を継承しようとするのが学際的な傾向ではないかと思われる。地理学はその歴史からして、ミニ学際とも言うべき、研究方法に対する考察をその内に育んできた。そしてこの学際的な方法、つまり総合的に考えようとするのが、地理学研究の潮流にとり残されそうになって以来、ノスタルジーとして、そして将来のカタストロフィックな展開を期待するものとして、常に地理屋の胸中にあるように思われる。つまり、帰納でも演繹でもない科学的な説明方法、もしかするとアブダクション³⁾に近い形をとるかもしれないが、地理屋のもやもやした思いを、

すっきりした形で示してくれる碩学を待望しているのではないかと思われる。

- 1) ヘロドトス、松平千秋訳(1972) 歴史上・中・下、岩波文庫
- 2) このように単純な二分律で語ることには、大いに危険であるが、また実際にはこういう単純な形でなかったが議論を簡単にするためにあえてこうした二分律で述べた。
- 3) 渡辺慧(1975) 知識と推測——科学的認識論 2 演繹と帰納の数理、東京図書。

一般教育学会設立大会に出席して

坂 口 良 昭

昭和54年12月8日(土)、東京の空は珍らしく抜けるような青空で、穏やかな心地よい日和であった。会場の東京農林年金会館の壮大な近代建築にまず目を見はりながら中へ入ると、受付には香大や東京農工大の先生方がきびきびした応待振りを見せていた。

10時から学会設立総会がはじまり、議長に日本大学法学部の杉山教授が選ばれ、堀地先生の経過報告をはじめ、会則の制定、事業計画、本年度予算、昭和55年度大会の開催地と、その時期、役員の出選など順調に進行して、予定通りここに一般教育学会が発足した。その間問題になったのは団体会員の扱いくらいのもので、大会準備の周到さは見事であった。会長は大阪大学人間科

学部の扇谷尚教授(教育学)で、会長講演も格調高く熱意に燃えたものであった。一般教育制度が発足して約30年、やっとこのような学会が出来たのは、遅きにすぎたといえるかもしれぬし、あるいは期が熟したといえるかもしれぬが、ともかく誕生の喜びを心から表明されていた。会場を見渡すと、大きなホールが満員で、後で受付の先生方に向ったところによると、予想を大幅に上廻る参加者の数で、用意した印刷物が間に合わず嬉しい悲鳴をあげたとのことであった。この満員の盛況は午後後の講演とシンポジウムに引き次がれ、活発な討議が展開された。

まず特別講演は、桜美林大学理事兼教授の清水良三氏による「一般教育の将来像—